

医学フォーラム

「私の歩んできた道」

—障害児の早期療育活動に参加した社会心理学の研究者として—

京都府立医科大学名誉教授 塩見 武雄

《プロフィール》



略歴

- 1942年6月 京都府福知山市京町で生まれる
- 1966年3月 岡山大学法文学部哲学科（心理学専攻）卒業
- 1968年3月 国際基督教大学大学院教育学研究科（視聴覚教育法専攻）修了（教育学修士）
- 1970年3月 京都大学大学院文学研究科（心理学専攻）修了（文学修士）
- 1971年4月～1984年3月 滋賀県八幡保健所で障害児の早期療育活動に参加する
- 1972年7月 京都大学大学院文学研究科博士課程 中退
- 1972年7月～1979年12月 福井大学助手（教育学部）
- 1980年1月～1993年3月 福井大学助教授（教育学部）
- 1993年4月～2002年3月 京都府立医科大学医療技術短期大学部教授
- 2002年4月～2006年3月 京都府立医科大学教授（看護学科）
- 2006年4月～現在 京都府立医科大学名誉教授
- 2006年4月～2011年3月 華頂短期大学教授
- 2011年4月～現在 華頂短期大学・京都華頂大学・佛教大学 講師（非常勤）

郷里は福知山

1942（昭和17）年6月、京都府福知山市京町で、5人兄弟の5番目として生まれた。すぐ上の兄とは10歳違いである。もし戦争がなかったら、私は生まれていなかったのではと思っている。同級生には、邦夫、英機などという名前があった。私の名前も本人に似合わず勇ましい。父は自転車商であったが、私が3歳の時に肺炎で亡くなった。警察署、郵便局、銀行などを遊び場とするような町の中で育った。子どもの頃、母の畑仕事を手伝った（手伝わされた）。山の畑でサツマイモを作っていて、よく食べた。

今もよくサツマイモを食べる。

小学生の頃の夏休みの思い出は、藪裏（やぶうら）水泳場で泳いだことと、盆踊りである。町内会単位で世話役の大人に引率されて泳ぎに行った。川底は小石で、足下には小魚が泳いでいた。雨が降って由良川が増水すると、泳げない印の赤い旗が堤防に揚がった。がっかりした。泳げるのは盆までの限られた期間であった。70歳になった今、幸せなことに、一年中毎日のようにプールで泳いでいる。盆踊りは内記二丁目と広小路で踊った。大学生になってから広小路で踊った時、小学校の同級生の浴衣姿を見て、大人の女性を感じてびっくりした。金山

君の家でピンポンをして遊んだ記憶もある。金山君とよく福知山駅の裏の川へ魚取りにも行った。水の中に入るのは金山君で、私は魚を入れるバケツを持つ係だった。私は蛭が苦手だった。金山君は昆虫採集が得意だったが、私は好きになれなかった。兄の影響で、ピンポンでよく遊んだ。遊び仲間の中では結構うまかった。しかし中学校で卓球部に入って下級生に負けた。それ以来ピンポンに興味をなくして、本を読むことに興味が集中した。夏休みなど、日に二度、町の図書館に通うなどして、何でも読んだ。

高校2年の時に、京都府高校スキー大会リレー競技で思いがけず、第3位となり、メダルをもらった。好きなことに毎日取り組んでいると、こんなおまけがついてくると、自信につながった。福知山高校3年の時のクラス担任は横山昭永先生でした。先生の英語の授業では、毎時間小テストがあった。先生の授業で、英語を学ぶコツがわかったように思っている。後に府立医大の職場で、同僚の西田直子、浅野敏朗両氏としゃべっているうちに、三人が、私の高校時代の恩師横山昭永先生を通じてつながっていることが分かり、2010年9月に先生を囲んで「同窓会」をやった。英語の授業の思い出とともに、感謝の気持ちを伝えることができた。

福知山には、「塩見」姓の人はたくさんいる。高校3年生の時のクラスで、男子生徒だけでも私を含めて3人いた。赤石山脈（南アルプス）に塩見岳という山がある。長野県駒ヶ根市あたりからその姿を眺めることができる。残念ながら眺めているだけで登ったことはない。

大学で心理学を専攻

大学に行くなら文学部と思っていた。心理学を選んだ理由は、教師にならなくても就職できそうだったからである。小学校教師の経験がある姉から、高校の教師になれといわれていたことがあった。

入学後の最初の2年間は、ほとんどの時間を、オーケストラの部室で、コントラバスの練習

と、夜遅くまでの仲間とのおしゃべりで過ごした。2年目には部長も経験した。

「知覚心理学」「学習心理学」「生理学」関連の講義を受けた。岡本春一先生から、フランシス・ゴルトン (Galton, F.) の講義も受けた。非常勤講師としてお見えになった今田恵先生 (関西学院大学学長) の「人格心理学」の講義も受けた。イタル (Itard, J. M. G.) の「アヴェロンの野生児」を読んでレポートしたことも覚えている。社会心理学への興味が出てきて、図書室で、“Readings in social psychology”などの面白そうな文献を見つけて読んだ。また書店で日本社会心理学会の機関誌である「年報社会心理学 創刊号」を見つけて購入したことも覚えている。

大学院に進む

社会心理学を学びたいという思いだけで、岡山大学大羽葵先生の紹介で国際基督教大学 (ICU) 大学院に進んだ。布留武郎先生 (京都大学文学博士) から、態度変容の実験的研究である、Hovland, C. I. (1949) の “Experiments on mass communication”, Ferguson の “Statistical analysis in psychology and Education” を教科書に使って指導を受けた。

研究室はまた、日本放送教育学会、日本視聴覚教育学会の事務局でもあった。国内や外国の研究者、学生が集まってきた。朝食を大学の食堂でとり、朝9時から夜中の12時まで、講義を受ける、parttime asistant (年俸¥98000)、図書館職員 (19:00~22:00) の仕事、授業の課題レポートの作成など、大学・研究室で過ごした。この間一日5本ぐらい牛乳を飲んだ。この牛乳は大学のキャンパス内にある牧場でつくられていて、学内に設置されている自動販売機で購入できた。クリーム層がビンの上部に4cmほど分離していた。

毎週土曜日の午後は、布留先生が通われていた教会へ、掃除のバイト (1回¥500+おやつ) に、三鷹から吉祥寺まで自転車で通った。日曜日には田崎健作牧師の説教も聞いた。

ICUでは日本語と英語が公用語であった。外

国人の男子学生と日本人の女子学生が英語で親しもうにしゃべっている風景が今も目の前に浮かんでくる。会議や、パーティでは英語のジョークで笑いが起こった。

ICU大学院入学時の英語の試験で、個々の単語の発音記号の正誤を問うような問題があった。できなかった。面接の時の、西本三十二先生(1969年 マグサイサイ賞受賞)の「君は英語が不得意かね」という言葉が今も記憶に残っている。佐渡島出身の後輩は、英語で「条件つき」入学になって、大学院入学後1年間、学部学生と一緒にfreshman Englishを課せられた。彼は大学院修了後、放送教育の分野で国際的な研究者として活躍した。

私は、英語で広がる世界に適応できず、京都大学を受験した。ICUの環境を土台にして、未来を思い描くことができなかった。同級生には、国連職員になるとか、アメリカ留学を志している人がいた。後に福井大学で教えた学生は、ICU大学院を經由して南カリフォルニア大学大学院に進んだ。ところが私はただ毎日の日課をこなすことで頭がいっぱいで、そこから思いを広げることができなかった。

ICUは、1967(昭和42)年2月から4月にかけて、大学紛争で休校状態が続いた。講義も仕事もなかった。毎日自転車で行く町(三鷹あるいは吉祥寺)の図書館に通って、一日中Krech, D. (1962)の“Individual in Society”をメモを取りながら読んだ。「態度」概念が社会心理学による人間理解のkey wordであると思った。

京都では、研究者の手伝い、児童相談所心理判定員、面接調査員、知能テスト、家庭教師(高校生・幼稚園児)などアルバイトで学生生活を続けた。もし室町寮(院生寮 上京区室町鞍馬口下る竹園町)に入寮できていなかったら学生生活を続けられなかったと思う。寮費が安かった。今も月¥400である。この寮には薬学から農学まで、文学部以外のいろんな専攻の院生がいて、月に一度はコンパがあり、親しくなった。今年賀状のやりとりをしている。医学部の院生は、いなかった。

園原太郎先生の学部生対象の授業「心理学の理論と方法」を、草野洋一さん(ラプランシュ他 村上仁監訳 精神分析用語辞典 みすず書房 1977の訳者の一人)と一緒に聞いた。自分の中で、心理学の知識を整理するのに役立った。一方先生の「発達心理学」の講義は一度も聴かなかった。障害児の問題に関わって、初めて先生の仕事に触れた。ようやくたどり着いたと思ったところに先生の仕事がすでにあった。お釈迦様の手のひらの中の孫悟空の話思い出した。今華頂では、子どもの発達関連の授業を担当している。

文学修士論文「恐れと行動 —commitmentが喫煙行動に与える効果—」では、一日に20本以上の喫煙習慣のある人を被験者として、態度変容(喫煙習慣を変える)の実験的研究を行った。被験者の喫煙行動(たばこをやめようと思う)の変化を質問紙で測定した。

障害児の早期療育活動 (ひまわり教室)への参加

文学修士論文は何とかまとめた。しかし質問紙の上での変化を確認するだけではなく、人が実際に態度を変えるところを、自然観察(実験的観察でなく)できる機会に出会いたいという思いが残った。そんな時、1971(昭和46)年春、先輩の第2びわこ学園職員(京大心理学専攻院生)Kさんから電話があって、障害児の早期療育活動への参加を誘われた。

それまでも心理学の院生仲間から、与謝の海養護学校の活動に参加するように誘われる機会もあったが興味はなかった。ところがKさんから誘われた時に、母親の障害児観の変化(「障害の受容」と呼ばれている)、すなわち、態度変容を自然観察できる機会ではないかと思った。障害についてよく知らないままに、OKの返事をしてしまった。

鎌田所長、千葉保健婦さんと出会って、他の2人のスタッフと一緒に、滋賀県八幡保健所で、早期療育活動を立ち上げるところから参加した。結局14年間この活動にのめり込んで、精神遅滞など、障害を疑われている子どもとの関わ

りの中で、母親が自分の子どもの障害について理解するプロセスに関わった。

1972 (昭和 47) 年 7 月、福井大学教育学部助手に採用され、大学院博士課程を中退した。職が決まって、結婚した。ひまわり教室カウンセラーの仕事を引き継いでくれる人を知り合いの中で探したが見つけられず、結局、福井から滋賀県近江八幡まで毎週通うことになった。

1973 (昭和 48) 年 11 月には、第 32 回日本公衆衛生学会総会 (広島) で、「精神発達遅滞児に対する働きかけ」というタイトルで、早期療育活動 (ひまわり教室) を報告した。

1974 年頃、東京杉並公会堂で行われた児童精神医学会総会で、障害児 (者) への働きかけが「差別」であるという、激しい議論が交わされた。またこの頃の、全国教研集会障害児教育分科会でも、養護学校の教育実践は差別だと、激しい議論が交わされていた。一方地域では「青い芝の会」の活動がさかんで、国鉄の駅やバスを、車いすで利用できないことへの抗議が続いていた。

態度変容を「自然観察」したいという思いだけで活動に参加した私には、「差別」に対応する準備はなかった。また、子どもの障害を理由に苦しんでいる母親の力になりたいという思いはあっても、母親を被験者にしてデータを集めるということではできなかった。

1968 年 5 月 21 日、フランスで、五月革命が起こった。労働者、学生がゼネストを行い、文教政策の転換、教授権限の縮小、学生の主体性の承認を主張した。これが欧米で、「うそつき実験」を手法とする社会心理学研究への批判の契機になった。Gergen, K. J. (1973) *Social psychology as history*. (J. of Per. Soc. Psychol., 26, 309-320.), Armistead, N. (1974) *Reconstructing social psychology* など多くの論文が出た。

実験室での社会心理学研究に疑問を持つことから障害の問題に関わり始めた私は、実験室の社会心理学と違った、「もう一つの」社会心理学のアプローチを見つけようとした。①社会問題との関係でなされた社会心理学批判の検討 (日本社会心理学会第 17 回大会仙台 1976 年 11

月) ②「障害児」と社会心理学 —社会問題との関係でなされた社会心理学への批判の検討— (福井大学教育学部紀要Ⅳ教育科学第 26 号 1976 年 12 月) ③日本の社会心理学 (人間探求の社会心理学 5 1979 年 7 月 朝倉書店)④実践的経験を基礎とする社会心理学の方法 (1988 福井大学教育学部紀要Ⅳ教育科学第 38 号)などを報告して取り組んだ。

また障害の問題を人権・差別の問題として考え始めた。人権の問題はまた、人間の尊厳の問題と呼ぶことも知った (年長障害児 (者) の暮らし—人権の問題としての障害者問題とリハビリテーション—1989 年 12 月)。

1993 (平成 5) 年 4 月、先輩の N 氏 (当時京都府立大学教授) からお誘いを受けて、京都府立医科大学医療技術短期大学部教授として京都に戻ってきた。その年の 12 月 9 日、京都府主催の「ひゅうまんセミナー (仏教大学四条センター)」で、イーデス・ハンソン (Edith Hanson) さんの話を聞いた。宗教の違い、肌の色の違い、そして日本の部落問題など、違いを理由に差別が起こること、「違うからおもしろい」、多様性を尊重することが、人権・差別の課題の解決につながるという話であった。

Hovland & Sherif (1952) が行った、米国の黒人に対する偏見をあつかった研究で明らかのように、立場が違っていると、違いへのこだわりが変わってくる。深く関わるほど些細な違いに気づいて、「違いが分かるようになって」、差別を感じてしまう。児童精神医学会総会、全国教研集会での激しい議論の応酬も、差別をテーマとするときの必然なのかもしれない。「差別ということばは強烈だ。人と人の関係を「差別する側」と「される側」に分ける。協議ではなく対立の世界だ。(谷津憲郎 沖縄復帰 40 年 差別にいらだつ不惑同士 朝日新聞 2012. 6. 6)」という見解も、同じ土俵で「差別」を議論することの困難さを指摘している。

国際連合憲章に「出会う」

早期療育活動で出会った母親の苦しみに、社会心理学の研究者としてどう対応すればよいか

分からないまま時間が過ぎてきた。また人権・差別という課題の前で立ち往生していた。しかし今、国連憲章のいう努力目標に向かって取り組みれば、社会心理学の研究者として、私なりに一歩踏み出せるのではないかと思っている。

子どもが障害児であった場合の母親の苦しみは、パール・バック (Pearl S. Buck 松岡久子訳 1979 母よ嘆くなかれ 法政大学出版局) の報告などによってすでによく知られている。私は、その苦しみは、国際障害分類 (ICIDH) という「社会的不利」、国際生活機能分類 (ICF) という「参加」のレベルの障害から由来していると思っている。能力の違いが、網の目のようにつながる人間関係にほころびを作ってしまう、あるいは、コミュニケーションに break down を引き起こしてしまうからである。

国際連合憲章 (1945年10月24日発効) は、人類の努力目標として「寛容を実行し、且つ、善良な隣人として互いに平和に生活」することをかかげている。ここには、「違い」を敵と味方、人間関係の上下、人と人以外を分ける理由にしたことが人類に不幸 (戦争) をもたらした、違いを多様性・社会の豊かさとして認めることが大切だという理解がある。

寛容の原則に関する宣言 (1995年11月 ユネスコ28回総会 第1条) によれば、「寛容とは、私達の世界の文化、表現の形式、人間の有り様 (ways of being human) の豊かな多様性を、尊重、受容、評価することである。それは知識、公開性 (openness)、コミュニケーション、思想・良心・信念の自由によって助長される。寛容は差異と調和している。それは道徳的義務であるのみならず、政治的、法的必要物である。寛容、それは平和を可能にする効力があり (virtue)、戦争の文化を平和の文化に置きかえることに貢献する」。寛容とは、心が寛いということ、また偏見とは、心が狭いということであろう。

渡辺弘純 (2006 日本の児童生徒における人間の多様性への寛容について —研究覚書— 愛媛大学教育学部紀要 第53巻 第1号 29-40.) によれば、「欧米において、宗教や政治の分野では、寛容 (tolerance) という用語が頻繁

に使用されてきた。しかし、欧米においても、心理学の分野では、寛容が余り使用されず、その対極にあると考えられる偏見 (prejudice) という用語が使われてきた (p. 30)。

社会心理学は、偏見・態度の研究に取り組んできた歴史がある。世の中に「心の寛い人」が多数派になるように、また人が、人間関係の網の目から抜け落ちることがないように、取り組んでいくことが、障害児の早期療育活動を経験した、社会心理学の研究者としての、私の今の仕事だと思っている。

終わりに

府立医大では、「心理学」、「臨床心理学」、「発達心理学」の講義を担当した。最終講義は、「違いと心理学」という題で話をした。心理学が、年齢 (生涯発達)、知能、性格 (personality)、能力 (発達障害など)、民族・宗教 (態度・偏見) などの違いに関わってきたこと、そして、違いが偏見・差別の理由になるのではなく、社会の多様性、あるいは豊かさとして実現されることへの期待を話した。

府立医大を退職した時、ひまわり教室終了児の10年後を一緒に追跡調査した、勝又浜子氏 (現在厚生労働省認知症・虐待防止対策推進室長) と出会う機会があり、また追跡調査をやるなどと話をした。障害児の早期療育活動に参加して、千葉保健婦 (師) さんから始まって、たくさんの保健師さんと一緒に仕事をし、お世話になった。この経験は、不思議な縁で府立医大の教員になった時、職場でコミュニケーションを交わす度に大いに役立った。また看護職を目指す学生を指導する時、いつもそのような経験を思い出していた。

残念な思い出が一つある。看護の資格取得を目指し入学してきた後、手足の麻痺、弱視という障害が進んで、退学した学生のことである。在学中は、「よくなるという希望、願い」があって、障害者手帳を取得しなかった。退学後本人から、心理学で資格を取得するために取り組んでいる、障害者手帳を申請中であるというメールが届いた。私は、学生が退学を決める過程で

話をする機会があった。しかし、学生が看護の資格を取得できるように、医大関係者の間で支

援を広げることができなかった。障害の問題に関わってきた一人として、残念な思い出である。